

学びのはじめに、改めて確認しておきたいこと

- 母国語以外に使いこなせる言語もなく、ヘブリス的知識など皆無に等しい。
- 言語的にも、文化的にも、地理的にも、聖書から最も遠い、日本語ネイティブの異邦人クリスチャンが、どこまで聖書の真理に迫れるか？
- それでもとことん、聖書の文脈に食らいついていけば、聖書の土台、柱をつかみ取り、確かに積み上げていけるものがある。

主がそのように記された聖書に信頼して、今日も学びましょう

1
南北の王
聖徒伝 132

「おごれる者 久しからず」

列王記 II 14章1～22節 歴代誌 II 25章 アマツヤとヨアシュ

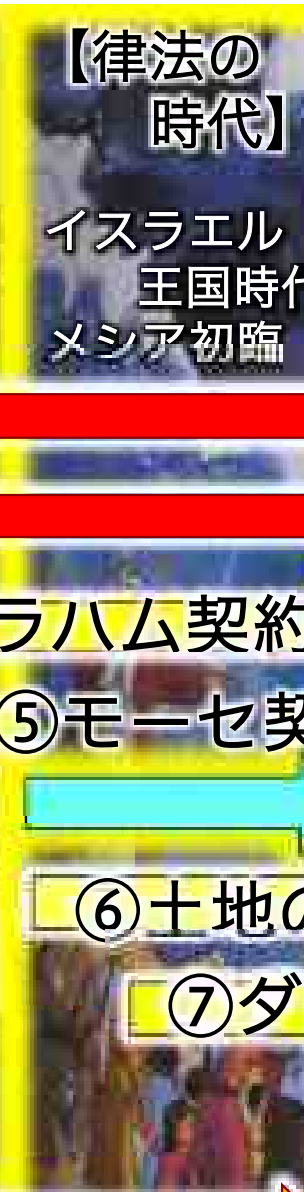
アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 南9代目・アマツヤ 歴Ⅱ 25章1～5節
- Ⅱ. エドムとの戦い 歴Ⅱ 25章6～12節
- Ⅲ. アマツヤの罪 歴Ⅱ 25章13～19節
- Ⅳ. 北のヨアシュとの戦い 歴Ⅱ 25章20～24節
- Ⅴ. アマツヤの死 歴Ⅱ 25章25～28節
- Ⅵ. まとめと適用

私にとっての偶像礼拝からの解放とは？



エドム・セイルの荒野



【無垢の時代】

天地創造

【良心の時代】

墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】

バベルの塔事件

【約束の時代】

アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】

イスラエル
王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

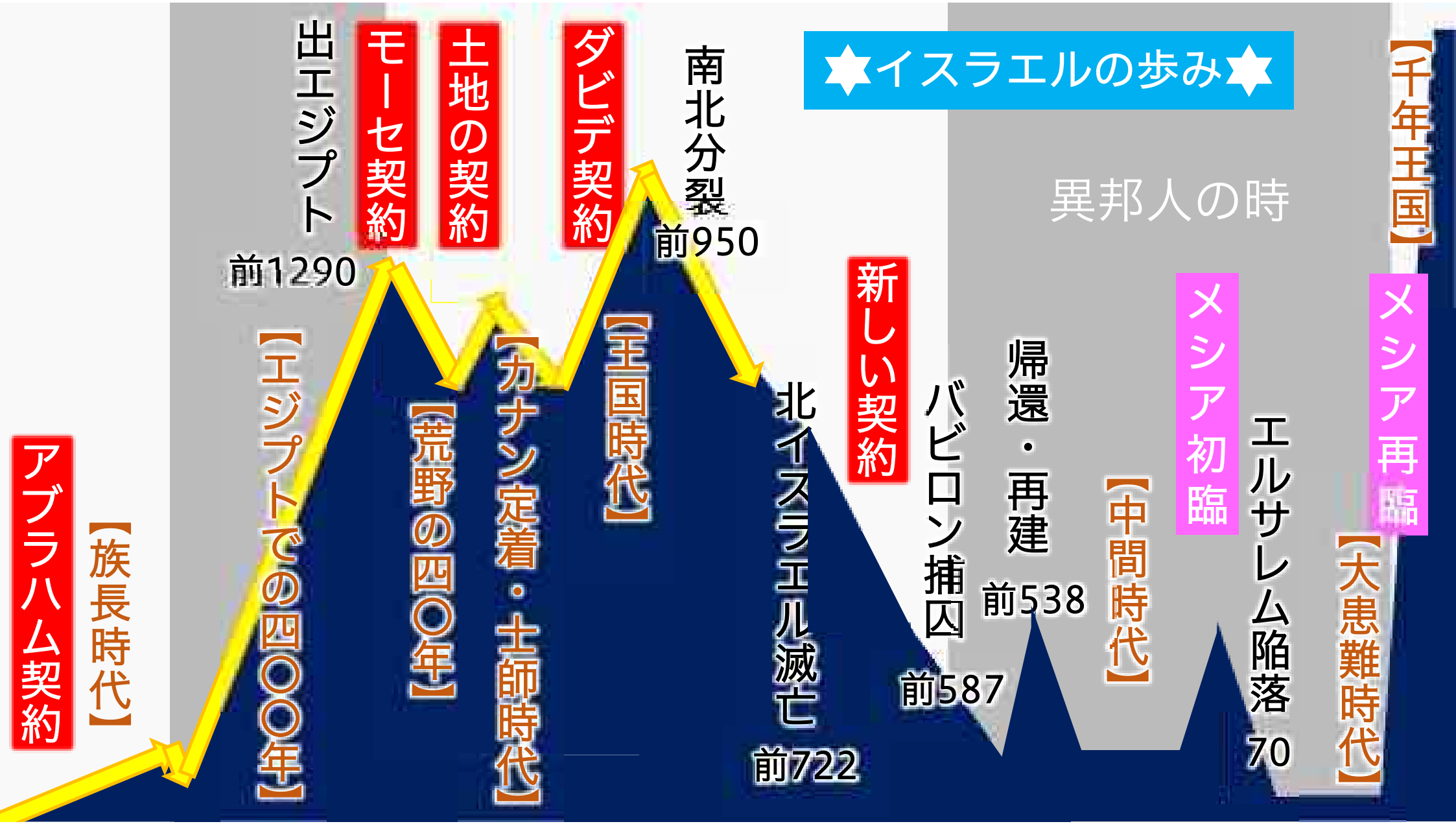
どの時代も
神の約束が礎にある

過去

現在

未来

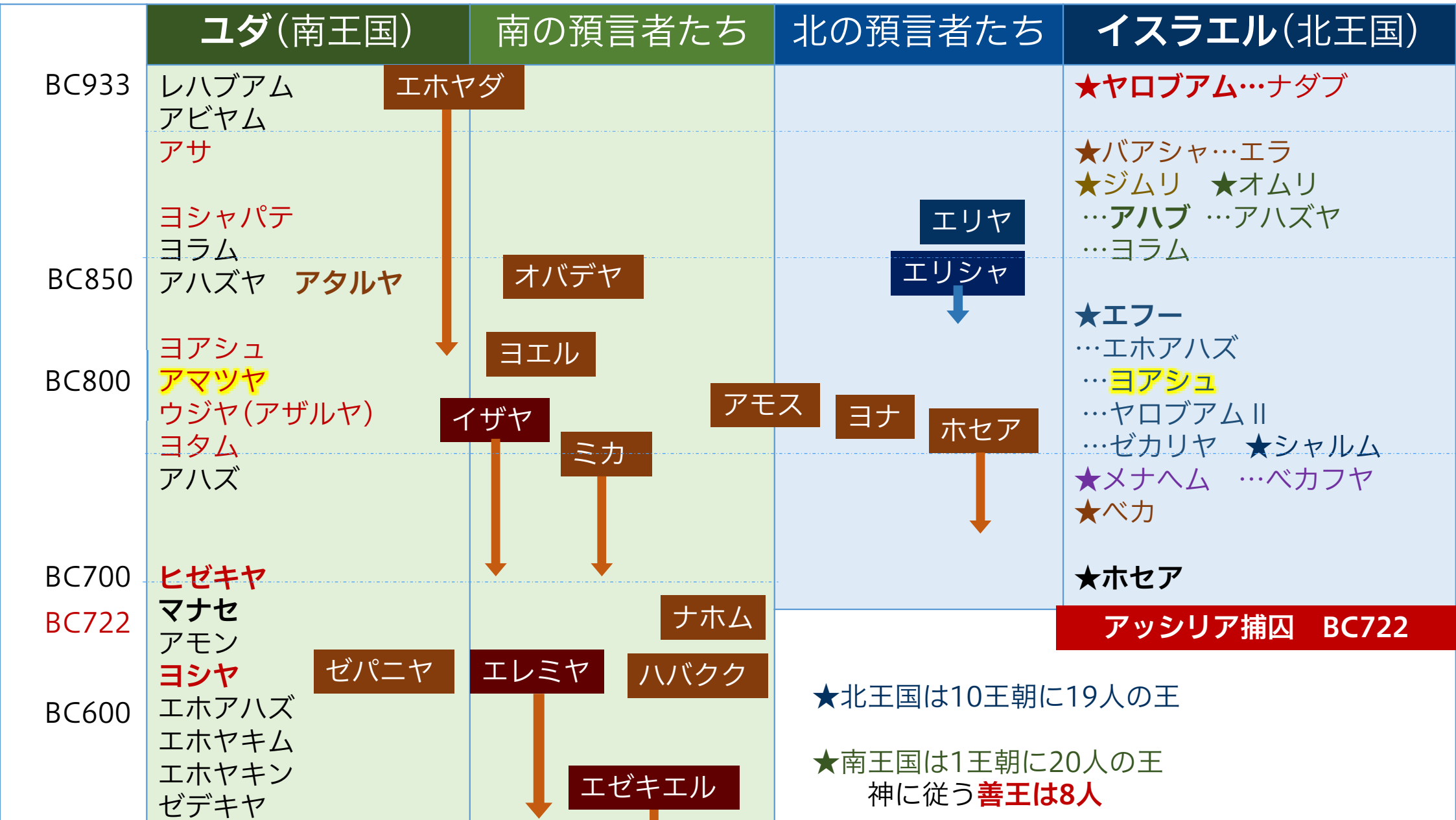
★イスラエルの歩み★



列王記 (第一〜第二)

第一	1〜11章	ソロモン王の治世 神殿建築	イスラエル(統一王国)		
	12〜16章	王国の分裂	ユダ(南王国)	イスラエル(北王国)	
第二	17〜22章	預言者エリヤ (アハブ王の生涯)	レハブアム アビヤム アサ ヨシャパテ ヨラム アハズヤ アタルヤ ヨアシュ アマツヤ ウジヤ ヨタム アハズ ヒゼキヤ マナセ アモン ヨシヤ エホアハズ エホヤキム エホヤキン ゼデキヤ	オバデヤ ヨエル イザヤ ミカ エレミヤ エゼキエル	ヤロブアム…ナダブ バアシャ…エラ ジムリ オムリ…オムリ…アハブ …アハズヤ…ヨラム エフー…エホアハズ …ヨアシュ …ヤロブアムII …ゼカリヤ シャルム メナヘム ベカフヤ ベカ ホセア
	1〜2章			エリヤ エリシャ アモス ヨナ ホセア	
	2〜13章	預言者エリシャ			
	14〜17章	二つの王国の歴史 北王国滅亡まで			アッシリア捕囚 BC722
	18〜25章	ユダ王国の歴史 滅亡まで			★北王国は10王朝に19人の王 善王はなし ★南王国は1王朝に20人の王 神に従う善王は8人

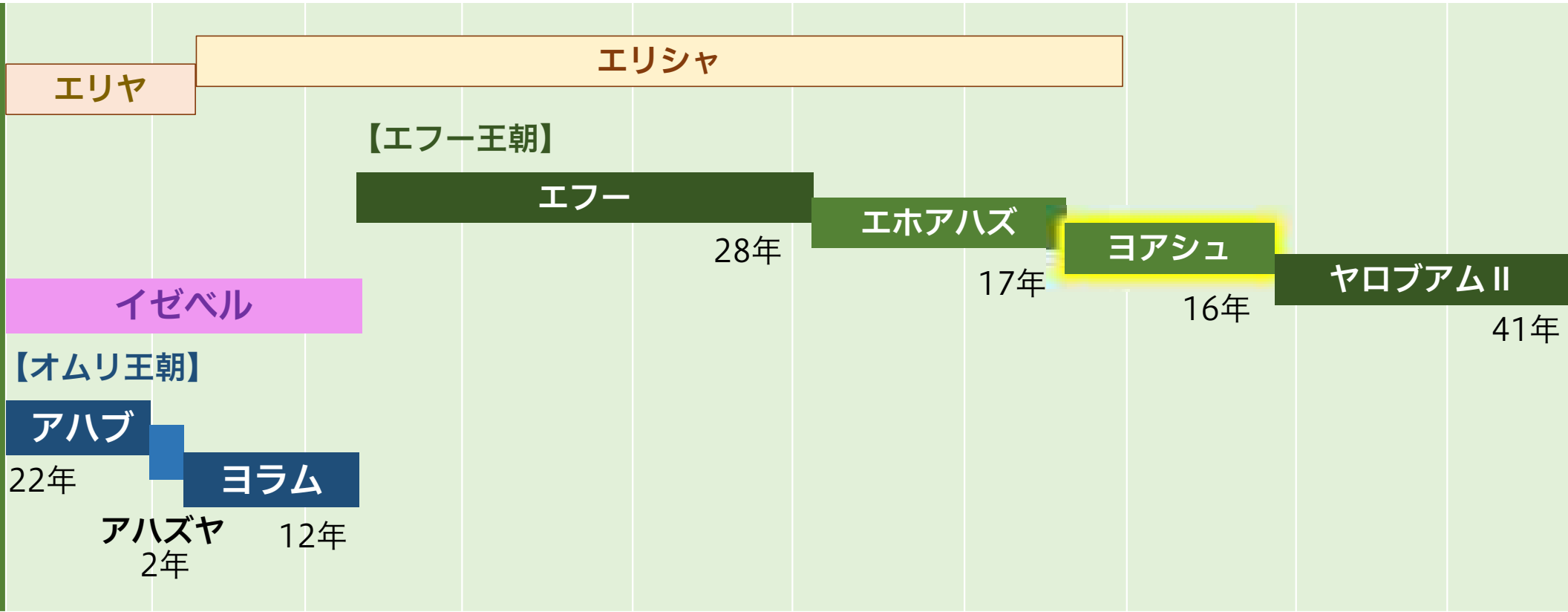
バビロン捕囚 BC586



★北王国は10王朝に19人の王

★南王国は1王朝に20人の王
神に従う善王は8人

北王国 イスラエル



南王国 ユダ



【北王国イスラエルの歩み】 Ⅱ 列王記

- ソロモンの偶像礼拝の罪の結果が、南北分裂。
- 北の最初の王ヤロブアムは、王国の南北に、金の子牛を築き、自ら勝手に祭司を任命した。
- 北王国の王は皆、ヤロブアムの罪の道歩んだ。アハブに至っては、バアル礼拝を国教化した。
- 最悪の時代に、エリヤ、エリシャが遣わされ、預言の通り、アハブの一族は滅ぼされた。



【南王国ユダの歩み】 II 列王記

- 神殿のあるエルサレムを都とした南王国は、神への従順と背きの間を揺れ動き続けた。
- 北王国のアハブの罪に呑み込まれ、王家全滅の危機に瀕したが、主がダビデの系譜を守られた。
- 再び盛り返した北王国と南王国は、共に黄金期を迎えつつあった。
- 一方、はるか北では、アッシリアが徐々に勢力を広げていた。





Ⅰ. 南王国9代目・アマツヤ 歴代誌第二 25章1～5節

エルサレム・黄金門

南9 アマツヤ アマツヤの即位 歴二25:1~2

アマツヤ*は二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であった。彼の母の名はエホアダン*といい、エルサレム出身であった。彼は【主】の目にかなうことを行なったが、全き心をもってではなかった*。

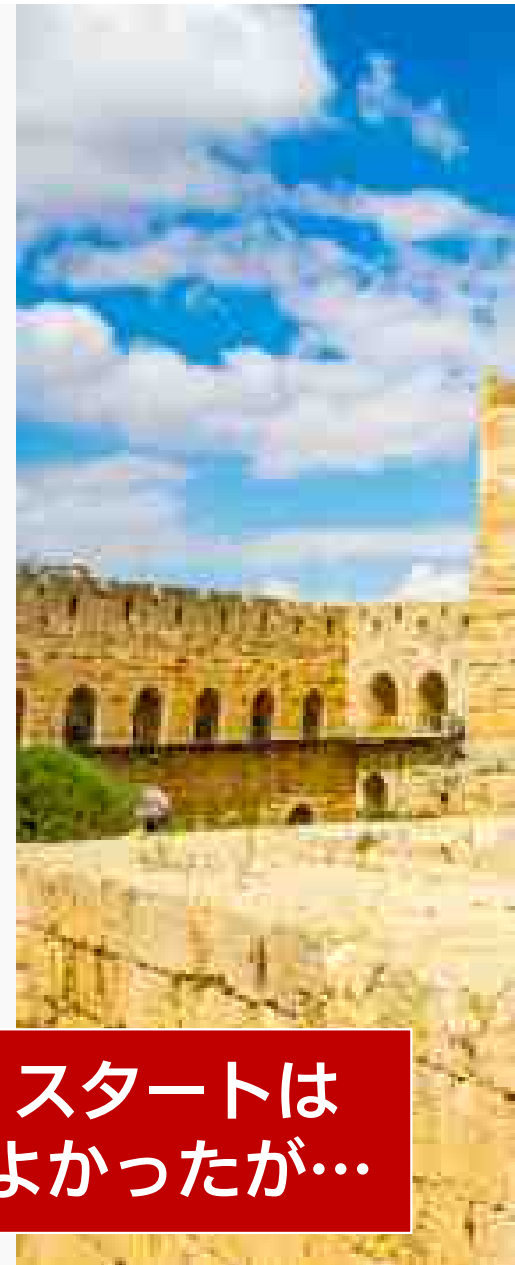
*“主は強大”

*“主はよろこばれる”

*“彼の父祖ダビデのようではなく、すべて父ヨアシュが行ったとおりに行った。列II 14:3”

→ヨアシュは、前半は善王、後半は悪王

スタートはよかったが…



南9 アマツヤ 父ヨアシュの仇 歴二25:3

彼の王国が強くなると、彼は、自分の父である王*
を討った家来たち*を殺した。

*祭司エホヤダの子ゼカリヤを殺したヨアシュ王は、
アラムとの戦いで重症を負い、寝台で殺された。

*モアブ人、アンモン人の妻を持つ家来たちの謀反。



南9 アマツヤ 律法に従って 歴二25:4

しかし、彼らの子どもたちは殺さなかった。モーセの書の律法に記されている*ところに従ったのである。

【主】はその中でこう命じておられた。「父が子のゆえに殺されてはならない。子が父のゆえに殺されてはならない。人が死ぬのは、自分の罪過のゆえでなければならない。」

*申命記24:16

■救いも滅びも、懲らしめも報いも、

個々人の選びの結果であるのが、聖書の大原則。



南9 アマツヤ ユダの兵力 歴二25:5

アマツヤはユダの人々を召集し、ユダ族およびベニヤミン族の全員を、父祖の家ごとに、千人隊の長、百人隊の長の下に配属した。二十歳以上の者を登録すると、槍と大盾を手にして従軍する兵が**三十万人***いることが分かった。

*ダビデの時代は、ユダ50万人(+イスラエル80万)。

南王国3代目アサ王の時代は、58万人。

→100年の間に半減している。





II. エドムとの戦い

歴代誌第二 25章6～12節

現ヨルダン・セイルの山地

南9 アマツヤ 北の傭兵 歴二25:6~7

さらに、彼はイスラエルから、銀百タラント*で十万人の勇士を雇った。

すると、神の人が彼のもとに来て言った。「王よ、イスラエルの軍勢をあなたとともに行かせてはなりません。【主】は、イスラエル、すなわちエフライムのいかなる人々とも、ともにおられないからです。

*銀3,400kg(3.4t) …現在の相場では3億4千万。

➡幕屋の台座に用いた銀が、百タラント。

ソロモン時代の1年の税収は、金666タラント。

サマリアの山の購入額が、銀2タラント。

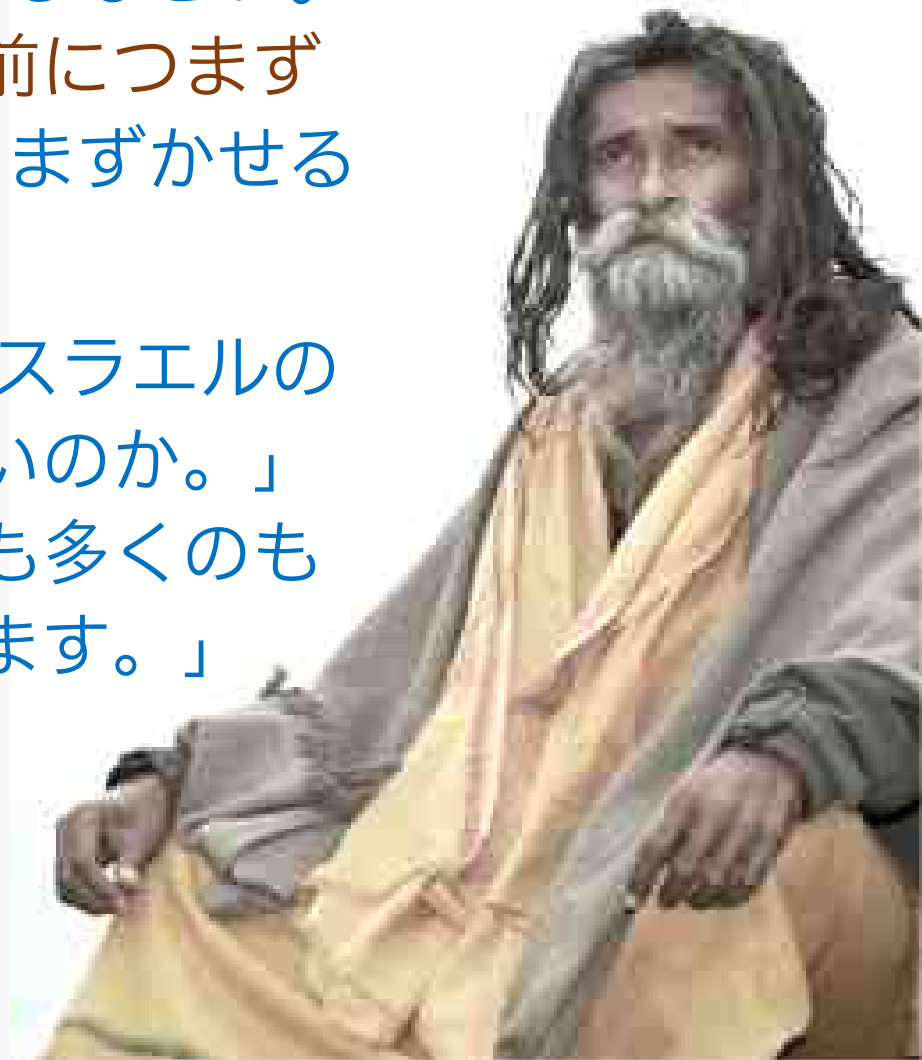


南9 アマツヤ 主の警告 歴二25:8～9

「しかし、もしあなたが行くのなら、そうしなさい。雄々しく戦いなさい。神はあなたを敵の前につまづかせられます*。神には、助ける力も、つまづかせる力もあるからです。」

アマツヤは神の人に言った。「では、イスラエルの部隊に与えた百タラントはどうしたらよいのか。」神の人は答えた。「【主】は、それよりも多くのものを、あなたにお与えになることができます。」

*不信仰のイスラエルと共に戦えば、アマツヤが敵に敗退させられる。



南9 アマツヤ 決断 歴二25:10

そこでアマツヤは、エフライム*から彼のもとにきた部隊を、もとのところに帰すために切り離した。彼らはユダに対して激しく怒り、怒りに燃えながら*自分たちのところへ帰って行った。

*北王国の中心となる部族が、エフライム族。

➔イスラエルの長子権を受け継いできた部族。

*誇り高いエフライムにとっては、最悪の屈辱。



南9 アマツヤ エドムへの勝利 歴二25:11~12

アマツヤは奮い立ち*、自分の兵を率いて塩の谷*へ行き、セイルの者たち*一万人を討った。

ユダの人々は一万人を生け捕りにして、崖の上に連れて行き、その崖の上から彼らを投げ落とす。彼らは一人残らず砕かれてしまった。

*主に従ったアマツヤを主が奮い立たせられた。

*死海とその沿岸。ソドム、ゴモラがあった辺りか。

*セイルの山地に住む「エドム人」のこと。

➡不信仰のサウルの子孫。イスラエルの宿敵。





III. アマツヤの罪 歴代誌第二 25章13～19節

ヨルダンの荒野

南9 アマツヤ 略奪 歴二25:13

アマツヤが自分とともに戦いに行かせずに帰した部隊の者たちは、サマリアからベテ・ホロン*に及ぶユダの町々を襲い、三千人を打ち殺し、多くの物を略奪した。

*北王国と南王国の境界にある町

→北王国が支配していた時期もある。

■士師の時代、ギデオンに対して一触即発の危機。

エフタの時には、ギルアデとの戦いが勃発。

→いずれも参戦できなかった怒りが発端。



南9 アマツヤ セイル人の神々 歴二25:14

アマツヤがエドム人を討って帰って来た後のこと、彼はセイル人の神々*を持って来て、それらを自分の神々として立てた。彼はその前で伏し拝み、犠牲を供えていた。

*ここだけ。カナンの神々の亜種だろうが、珍しい偶像に惹かれた？

- 偶像礼拝に陥ってしまったアマツヤ。
後年、偶像礼拝に陥った父ヨアシュの道を、辿っていく。



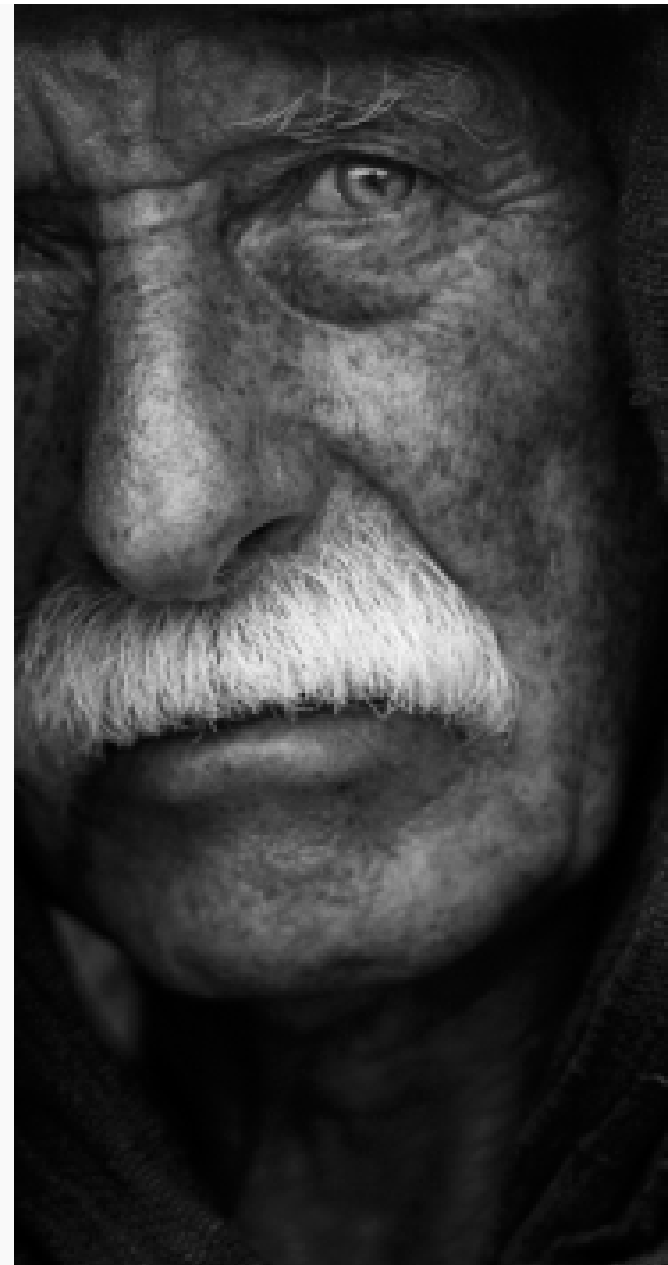
南9 アマツヤ 主の怒り 歴二25:15

すると、【主】はアマツヤに向かって怒りを燃やし、彼のもとに預言者を遣わして言われた。

「なぜあなたは、あなたの手から自分の民を救い出すこともできないような神々を求めたのか。」

■ 打ち負かした相手の神々を求めるのは異様。

➔ 当時、民族間の戦いは神々の戦いとされ、勝利者の神々が敗者に強要されるのが常。



南9 アマツヤ 招いた滅び 歴二25:16

彼が王にまだ話している最中に*、王は彼に言った。
「われわれはおまえを王の助言者にしたか。やめよ。
なぜ、打ち殺されるようなことをするのか。」

そこで、預言者は話すのをやめたが、こう言った。
「私は、神があなたを滅ぼそうと計画しておられる
のを知りました。あなたがこのことを行い、私の勧め
を聞かなかったからです。」

* 神の言葉を遮ったに等しい。預言者への脅しまで。

→ 父ヨアシュは、預言者ゼカリヤを殺害。
父同様に、不信仰の道を行くアマツヤ。

不信仰への裁きが
告げられた





IV. 北のヨアシュとの戦い 歴代誌第二 25章14～24節

サマリア

南9 アマツヤ

■ 歴二25:17

ユダの王アマツヤは、協議の上で*、エフーの子エホアハズの子、イスラエルの王ヨアシュに使者を送って言った。「さあ、直接、対決しようではないか。」

*神なき人の協議の虚しさ。実質は扇動。

→自らの決断が滅びを招くとも知らず…。

■歴史的に、民主主義が正常に働き得るは、信仰者たちの存在が背後にあるときのみ。

例)かつてのアメリカは例外的な成功事例。



罪人の協議は
衆愚政治から
滅びに至る

南9 アマツヤ ヨアシユの警告 歴二25:18

イスラエルの王ヨアシユは、ユダの王アマツヤに使者を送って言った。「レバノン*のあざみが、レバノンの杉に使者を送って、『あなたの娘を私の息子の妻にしてくれないか』と言ったが、レバノンの野の獣*が通り過ぎて、そのあざみを踏みにじった。」

*イスラエル北方。杉の産地。約束の地の一部でも。

■レバノンからアハブに嫁いだのが悪女イゼベル。

北のアハブの娘アタルヤを南のヨラムが娶ったが、その子アハズヤは、北王国のヨラムと共に、

エフー*に打ち殺された。エフーはヨアシユの祖父。

なぜレバノン？

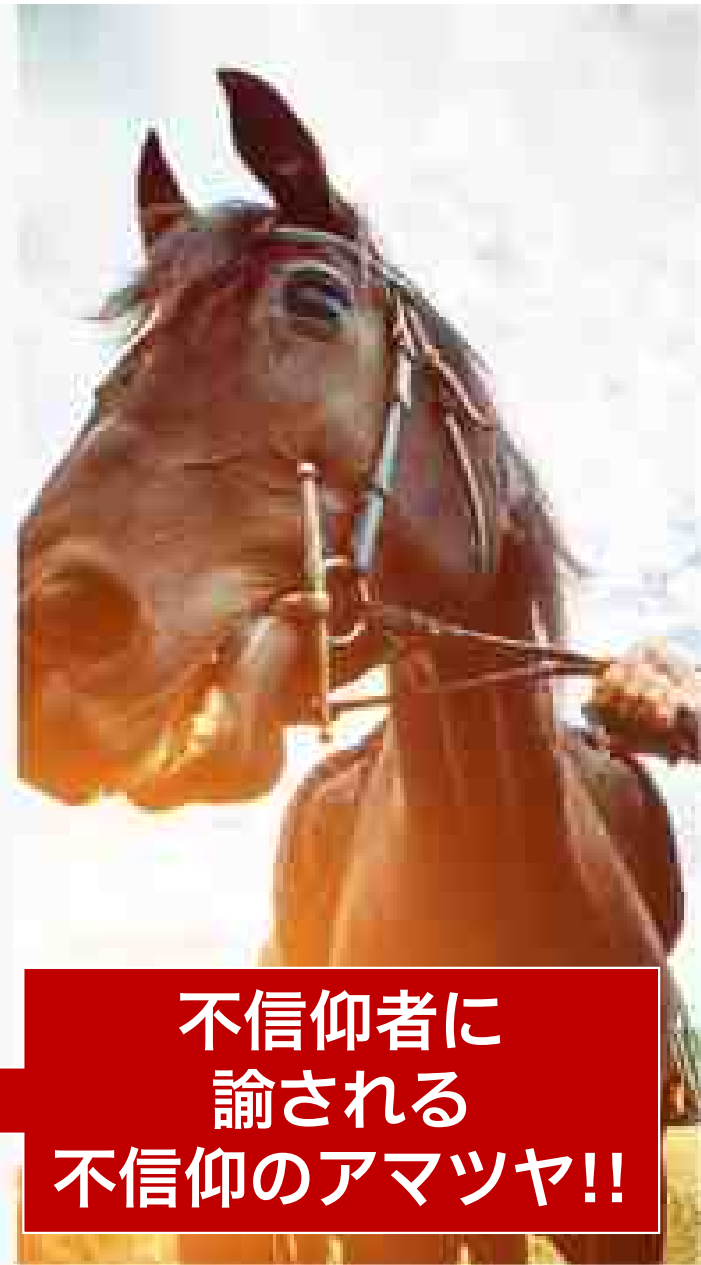
バアル礼拝の
悪影響が
無意識まで浸透

南9 アマツヤ 拒絶 歴二25:19~20

あなたは、『どうだ、自分はエドムを討った』
と言って、心高ぶり、誇っている。今は自分の
家にとどまっていなさい。なぜ、あえてわざわ
いを引き起こし、あなたもユダもともに倒れよ
うとするのか。」

しかし、アマツヤは聞き入れなかった。それは
神から出たこと*であって、彼らを敵の手に渡
すためであった。彼らがエドムの神々を求めた
からである。

*主がアマツヤの心を頑なにし、裁かれた。



不信仰者に
諭される
不信仰のアマツヤ!!

南9 アマツヤ 決戦 歴二25:21~22

イスラエルの王ヨアシュは攻め上った。彼とユダの王アマツヤは、ユダのベテ・シェメシュ*で直接、対決した。

ユダはイスラエルに打ち負かされ、それぞれ自分の天幕に逃げ帰った。

*北と南の境界にある町。

➡広大な平原を戦いの場に指定したか。

■自信満々で臨んだアマツヤは、散々な結果に。

➡主に頼らない、人の思い込みの虚しさ。



南9 アマツヤ 破壊された都 歴二25:23~24

イスラエルの王ヨアシュは、エホアハズの子ヨアシュの子、ユダの王アマツヤをベテ・シエメシュで捕らえ、エルサレムに引いて来た。そして、エルサレムの城壁をエフライムの門から隅の門まで、**四百キュビト***にわたって打ち壊した。

また、オベデ・エドムが管理している神の宮にあったすべての金と銀、すべての器、王宮の財宝、および**人質を取って***サマリアに帰った。

*約180m。城壁を破壊は屈辱的な完敗の現れ。

*アマツヤ自身も虜囚として連れ去られた。



王の傲慢に
主が下された
裁きの結果

A landscape photograph showing a rocky hillside with sparse vegetation. The sky is filled with soft, colorful clouds, and a faint rainbow is visible in the distance. The overall scene is serene and natural.

V. アマツヤの死

歴代誌第二 25章25～28節

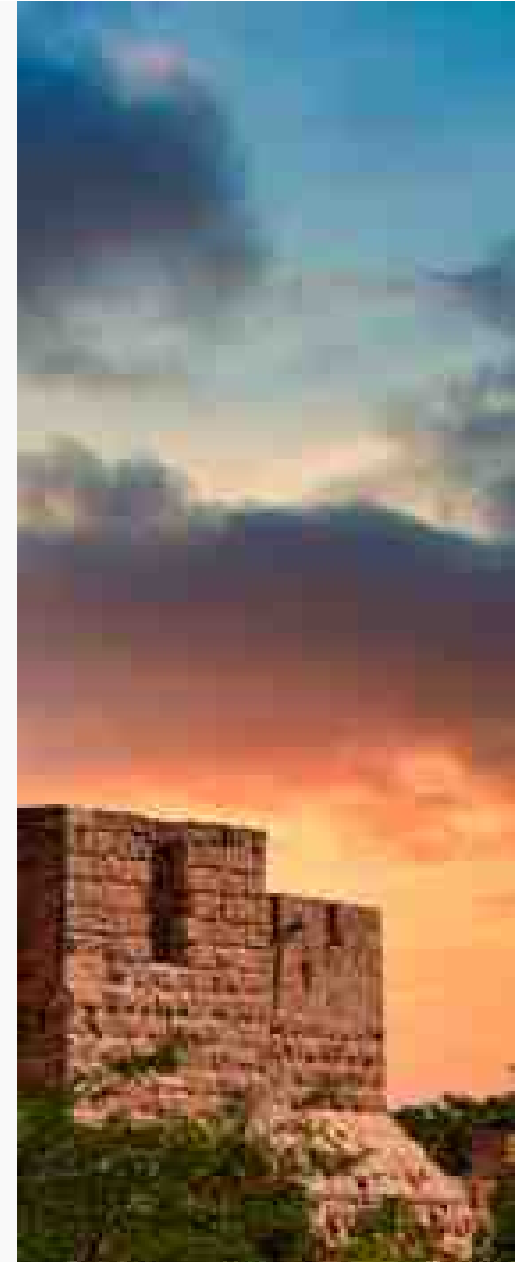
サマリアの丘

南9 アマツヤ アマツヤの晩年 歴二25:25~26

ユダの王ヨアシュの子アマツヤは、イスラエルの王エホアハズの子ヨアシュの死後、なお十五年生きた*。

アマツヤについてのその他の事柄、それは最初から最後まで、『ユダとイスラエルの王の書』に確かに記されている。

- *ヨアシュの虜囚となっていたアマツヤは、ヨアシュの死後、解放されて帰国したのだろう。
- 晩年に解放されたのは、神の憐れみ。
- 神への悔い改めもあったのだろう。



南9 アマツヤ アマツヤの死 歴二25:27~28

アマツヤが【主】に従うことから離れたとき*、エルサレムで人々が彼に対して謀反を企てた。彼はラキシユに逃げたが、人々はラキシユ*に追っ手を送り、そこで彼を殺した。

彼らは彼を馬に乗せて運び、ユダの町に先祖とともに葬った。

*再びの不信仰の末に絶命。享年56歳。

*南の初代レハブアムが建設した要塞都市
二重の城壁で囲まれた堅固な要塞。

→発掘調査では、かつてのエリコ以上とも。





V. まとめと適用

私にとっての偶像礼拝からの解放とは？

【アマツヤの罪と罰】

- 父ヨアシュの仇を、当人だけにとどめたアマツヤ。
報いは当事者だけに求められる。律法に従い、報復の連鎖を止めた。
→まぎれもなく、主に従う信仰者の姿がここにある。
- 打ち破ったエドムの神々を持ち帰り、拝んだ倒錯。偶像礼拝の罪。
預言者による神の叱責をも拒み、心頑なにされ、裁きを招いた。
→傲慢が、悔い改めを拒み、自ら滅びをたぐりよせる結果に
- 虜囚から解放されてもなお罪を犯し、謀反によって殺された。
→前半は善王、後半は悪王。父ヨアシュの道をそっくり辿った。

偶像礼拝の本質を考えよう

- 偶像とは、唯一の真実の神ではない、すべての神々を指す。
エジプト、カナンの神々も、日本の八百万の神も、すべて偶像。
- 唯一の神以外の存在を拝むなら、それはまぎれもなく偶像礼拝。
- 聖書が記す、“神(エル)”、“神々(エロヒーム)”は、どちらも、
真実の神にも、偶像にも用いられる言葉。
- 聖書がつきつけるのは、二つに一つを選択。
人を造られた唯一の神か、人が造った神々か。どちらを選ぶか。

現代における偶像礼拝とは？

- 選択は二つに一つ。真の神を礼拝しないなら、偶像を礼拝している。特定の宗教を持たない人も、無視論者も例外ではない。
- 古代の人々は、「この神を信じろ」と各々の部族の神を信じた。「自分を信じろ」と叫ぶ現代の人々は、自分自身を神としている。「私を信じろ」と迫る独裁者は、自分を神としている。
- 「自分を信じろ」が、現代のポストモダンの時代の合い言葉。「絶対の価値観などない」なら、自分の感性、感覚が絶対とされる。

世の絶え間ない争いは、偶像礼拝の結果

- 絶対化した自分は、他者の絶対と衝突する。世の混沌は増すばかり。世の言う「多様性、共生」は、世界の現実。ゴールには成り得ない。
 - ➔ 結局は、力ある者が支配するだけの世界。競争はさらに苛烈に。
- 民主主義の末路が、独裁であり、全体主義。
 - ➔ 罪ある人が、欲望のままに重ねた選択の当然の結果。
- 民主主義がかりうじて機能するのは、一定数の信仰者が存在する時。
 - ➔ 民の信仰が衰退すれば、たちまち衆愚政治に陥っていく。

問題の中心は、偶像礼拝から教理的逸脱へ

- バビロン捕囚以降、さすがに偶像礼拝には懲りたイスラエル。しかし、彼らは、口伝律法という教理的逸脱に陥っていった。
 - ➔ 律法を厳格に守ろうとするあまり、拡大解釈が生じ、ついには、律法の本質から逸脱した教えが主流になっていく。
- メシアは、モーセの律法には忠実に従われたが、人の教えに過ぎない口伝律法は、完全に拒否。それゆえ宗教者に敵対視された。
- ペンテコステ以降の教会時代にも、教理的逸脱が最大の問題。
 - ➔ 口伝律法にますます陥るイスラエル。教理的逸脱に陥る教会。

偶像礼拝と教理的逸脱の共通の基盤

- 教理的逸脱の背後にも、自分の思い・感性の絶対化がある。
例)「～してください」という、お願いの祈りばかりを何時間も?!
→ いったい、どれだけ欲深いのか?
- 癒やしや奇跡の強調、繁栄の神学、その背後にも「自分」の絶対化!!
- 偶像礼拝が魅力的なのは、人の欲望を満たすストーリーがあり、欲望を満たす具体的な手段、システムがあるから。
例) 人間的な神々の神話。漫画、アニメのありえないヒーロー。
物的・性的欲望の肯定。神殿娼婦や寺社の隣にある花街など。

人の罪の狡猾さを認識しよう

- もちろん、クリスチャンと名乗る人は誰も、自分が神とは言わない。しかし、巧妙に、背後で「自分」が働いてはいないだろうか。
- 「御心ならば」と言つつ、優先しているのは、自分のお心？
「祈っても平安がなかった」 → あなたの感情・感覚が最優先？
- おみくじのように、都合よく御言葉を拾い出していないか？
断片的な言葉を、自分の思いに合わせてつなぎあわせただけの、そんな聖書理解を行ってはいないだろうか？

愛するという決断を!!

- 自動的に無意識に身につくのが、生まれ育った家や地域の文化。クリスチャンホームに生まれ育てば、キリスト教の文化は自然と身につくだろう。
 - ➔ しかし、自然にクリスチャンになる人はいない!!
どこかで必ず、選択と決断の上での主への信頼が求められる。
- 信仰は、どこまでも、自発的な応答に基づくもの。主が、人間に自由意志を与えられたのは、愛する存在とするため。自由意志に基づく決断のないところに、愛はない。

「わたしを愛するか」 主に信頼して応えることが本当の信仰

御言葉に聞くことから始めよう

- 誰も、福音を聞かないで信じることはできない。
御言葉を読まないで、主の御心を聴きとることはできない。
信仰はまず、聞くことから始まり。聞くことで深められていく。
- どこまでも都合よく物事を解釈するのが、私たち罪人の現実だ。
先ず何より、聖書を聖書の文脈で読み、学ぶことから始めよう。
性懲りもなく繰り返される罪人の姿も、私たちの反面教師となる。
- アマツヤが、父ヨアシュの仇を制限できたのは、律法に聞いたから。
主に聞き従った、ゆるしの決断が、平安をもたらしたことだろう。

御言葉に聞いたならば、実行しよう

- 聖書が繰り返し信仰者に求めるのは、主に聞き従うこと。
御言葉を聞いたなら、**従う**という具体的な行動が求められる。
- 聞いて理解したなら、**実行**するだけだ。
実感はあくまで、**実行**した結果としてもたらされる。
- 主は常に、信仰者に、未知の領域へと次の**歩み**を促される。
前もっての平安などないのが当然。聞いて理解したなら**踏み出そう**。
その足を主が確かに支えてくださる。平安は**歩み**の中で味わされる。

主に聞き従う歩みのただ中で、平安を味わいっこう!!

てん とう
「天のお父さま。わたしは、あなたに背き、^{そむ}罪を^{つみ}重ねてきました。

わたしは、まぎれもない^{つみびと}罪人です。この^{つみ}罪をゆるしてください。

わたしは、^{かみ}神の^こみ子イエス・キリストが、
^{つみ} ^{あがな} ^{じゅうじか} ^し

①わたしの罪を贖うために十字架で死に、

^{はか} ^{ほうむ}

②墓に葬られ、

^{みつかめ} ^{ふっかつ}

③三日目に復活した^{しん}こと、を信じます。

^{じぶん}自分では、どうにもならない^{おも} ^{かんじょう}思い、^{とき} ^{わたし} ^{くる}感情が、時に私を苦しめます。

^{しゅ}主よ。あなたの^{いのち} ^{みことば}命の御言葉を、^{せつ} ^{した} ^{もと}切に慕い求めますから、

^{みたま}御霊によって^{りかい}理解させ、この^み ^お ^だ身を押し出してください。

^き ^{したが} ^{あゆ}聞き従い、^{めぐ} ^{あじ} ^し ^{もの}歩みつつ、さらなる恵みを味わい知る者としてください。

^{しゅ}主イエス・キリストのみ名^な ^{いの}によって祈ります。 アーメン」